先輩職員の声 〈検察庁はどのようなところですか？〉

未経験の私でも・・・

私は，事務局部門の人事課で職員の給与や採用活動に関する業務を行っています。
私はこれまで，事務局，検務，捜査・公判の３部門をそれぞれバランスよく経験させてもらってきました。
検察庁では，２年程度のサイクルで，主に採用地方検察庁の所在地県内を異動します。
私は，入庁するまで法律を学んできませんでしたが，周囲の先輩方に気軽に相談できる環境が整っている上に，研修制度が充実しているおかげで，安心して職務に取り組めています。
（２０代女性（大卒程度試験採用））

最後の砦としての役割

私は現在，検務課事件係という部署で，事件の受理・処理や勾留に関する業務をしています。
事件係では，刑事事件の受理手続をし，その手続に誤りがないかの点検をしたり，勾留に関わる書類を作成するなどの仕事をしています。
小さなミスが重大な権利侵害に結びつく可能性もあり，書類を裁判所等の外部に提出する際に最後の砦となる大切な役割を担っているので，毎日緊張感を持って仕事をしています。
（２０代男性（大卒程度試験採用））

立会事務の奥深さ

私が経験した中で一番思い出深い業務は立会事務官です。
立会事務官は，検察官をサポートし，二人三脚で犯罪捜査を行います。
その業務内容は，事件の取調べに立ち会って調書を作成したり，警察や裁判所，弁護士等との連絡・調整をしたりと，多岐にわたります。
時には検察官から事件に関する意見を求められることもあり，社会正義実現のための捜査の前線で業務を行っていることを実感します。
また，被害者対応の際には少しでも不安な気持ちにならないよう，丁寧な対応を心がけたところ，お礼の手紙を頂いたときにはとても嬉しく思いました。
（２０代女性（大卒程度試験採用））

副検事を目指して

私は，立会事務官を経験し，自分が主体となって取調べ等の事件捜査をするなどして刑事事件の真相解明に当たりたいと思うようになり，将来のキャリアアップの選択肢として副検事を目指すことを視野に入れています。
自分の将来像を様々に描くことができるところは，検察庁ならではだと思います。
（３０代男性（高卒程度試験採用））

特別捜査部の魅力

私は，全国の検察庁の中でも，東京，大阪，名古屋にしかない特別捜査部での勤務経験があります。
特別捜査部は，警察からの送致事件を扱う他の捜査部と違い，独自捜査事件を扱う事が多くあるため，多数の職員が共同して捜査していくこともあり，チームで大規模事件の真相を解明することができたときは，他では味わえない達成感があります。
（３０代男性（高卒程度試験採用））

結婚を機に

私は元々，関西のとある地方検察庁出身ですが，より見識を広げたいと思い，東京にある法務省に異動しました。現在は結婚を機に異動を希望して，名古屋で勤務させていただいています。
検察庁は全国の都道府県にあるので，いろいろなライフイベント等に対して，仕事を辞めることなく続けることができるのも，大きな魅力だと思います。
（３０代女性（大卒程度試験採用））

家族との時間

今年，第一子が生まれ，上司の勧めもあり，男の産休・育休を取得しました。
検察庁では，男性が産休・育休を取得できるサポート体制が整っており，私も産後の妻を労り，生まれたばかりの我が子と大切な時間を過ごすことができました。
（３０代男性職員（大卒程度試験採用））

仕事と家庭の両立

私は現在二児の母で，約１年間の育休を２度取得しました。
育休中は，復帰に向けての上司との面談や同僚とのコミュニケーションの場を設けていただいたので，育休後もスムーズに仕事に戻ることができました。
仕事に戻ってからは，通常よりも早く退庁できる制度等を利用しており，仕事と家庭をうまく両立できています。
（３０代女性職員（大卒程度試験採用））

私のリフレッシュ方法

私は，１時間単位で取得できる年次休暇や早出・遅出制度を利用し，いつもより早く退庁して大好きなサッカーを家族と一緒に観戦したり，気になっていた近所のカフェでモーニングを堪能してから出勤するなどして，積極的に制度を活用しています。
検察庁では，このように様々な制度が充実しているので，ワークライフバランスをうまく実現できています。
（４０代男性職員（高卒程度試験採用））

詳しくは各地方検察庁業務説明会にお越し下さい